

●水環境・その他 (1-C-15-3～1-C-16-2)

このセッションでは、気候変動が水環境に与える影響に関連する話題が2件、水環境保全に対しての新たな試みに関連する話題が2件報告された。

1-C-15-3 では、霞ヶ浦の表層および低層の水温変化に与える気温変動の影響の有無を、30年間にわたる水温観測データのトレンドから解析したものである。データの解析方法によってトレンドが見られない場合と見られる場合があり、こういった類の解析の難しさが感ぜられた。しかしながら、土地利用の変化の水温への影響を評価するための方法論という意味合いも含めて注目すべき検討課題であり、今後の環境モニタリング、特に地球温暖化の環境影響を観測するうえで重要な方法論、ならびに方向性を与えるものである。

1-C-15-4 では、豪雨とそれに伴う河川増水が浄水処理プロセス管理に与える影響という、プロセス工学的にも興味深い着眼点の研究であった。結果として、水量、濁度と凝集剤(PACl)添加量の関係にいくつかのパターンが見出された。フロアからの質問にもあったが、ダムでの放流方法によってこの影響は大きく異なるものと思われる。今後、これらの水質指標とこういったイベントの相関性をより詳細に突き詰めることで、より汎用的、合理的な浄水管理に適用される可能性を持つものである。

1-C-16-1 では、環境保全型農業の課題として特定の農薬が集中的に使用される傾向にあることを懸念し、その現状を確認した研究であった。報告の中では、これらの農薬の環境動態の確認、あるいは水域の生物毒性の確認など、貴重なデータが示された。フロアからの質問もあったが、今後は環境保全型農法の導入実績とこれらの動態などとの定量的な因果関係に関してさらに立ち入って研究が進められることが望まれる。

1-C-16-2 では、発表者が提案している地球温暖化に関する環境家計簿の水環境版を実際の河川(大和川)に適用に関するうえでの予備的な検討が報告された。BOD 負荷や流達率など、河川汚濁を考えるうえで重要な視点を含んだものであった。

(東京大学 生産技術研究所 迫田 章義)